

蔡の祈禱所

紀伊徳川家と高尾山

22

明治大学博物館 外山 徹

徳川重倫の人物像

八代藩主重倫は安永四年(一七七五)二月にその座を退く。数え三〇歳という若さでの引退は、主君の横暴に耐えかねた重臣たちの主導によるものとも言われている。

人物像の落差

葉王院文書史料集の活字を拾っている限り、病弱で子煩悩な殿様というイメージ以外になく、むしろ、巷間伝えられる重倫像は意外なものであった。明和八年(一七七二)八月に葉王院隠居湛玄に宛てた重倫直筆の書状はその人柄を推し量る真の素材と言えらる。原本を見ると、筆致は太く力強く、病死を案ずる内容とはいかにも不釣り合いである。また、「佛



徳川重倫木像 五百羅漢寺蔵 (写真提供:和歌山県立博物館)

くとも虚弱な殿様のイメージとは全く異なる。『南紀徳川史』には重倫の評伝が多数収録されている。その多くを語っているのは神野嘉功という人物で、書中には九七歳とある。同書は明治三四年(一九〇二)に完成しているので編纂に相応の年数をかけていると考えても、嘉功は寛政・享和年間の生まれと推測される。重倫とは祖父と孫くらいの年齢差であり、確かにその逸話を口承する世代の人物と言える。

評伝が数多く残された理由もそこにあるだろう。まず、「御心：猛々しく」と、武芸に対する関心は相当強かったようだ。剣術の稽古上覧の折、有馬吉蔵・窪田三之丞両手練れの激しい立ち合いを見た後、重倫はもう一本を所望。御前近くに引きよせて対決させるが、両名は剣の勝負が着いた後、後も組打ちを続け、上段に立っていた燭台が倒れて曲がる程の激しさがあつたが、重倫は「一気



ある松平出羽守邸に高樓が立ち、夏に納涼の婦人らが登樓し、屋敷の中を見て嘲笑したかと勘気がさわって、花火を打ち込ませるといふ事件はよく知られていた。好奇心旺盛な様子も窺える。参勤交代の帰途、箱根芦ノ湖の水深を測るよう下命したという。御徒の一人が名乗り

出るとその場で脇差を下賜。御徒は水に潜り、湖水中央の五〜七間(約九〜二米)から下は真の闇でそこから浮上してきたと報告したところ、海川と違い様子かわからぬところをよく行つたと金百両を手自から褒美として下したという。

身分にこだわらない鷹揚さとして、船乗りと相撲を取つた逸話もある。紀の川の中州で船乗りたちが相撲を取っているのを遠望すると、近くに寄るよう命じた。恐縮して平伏する一同に相撲を続けさせて、一番強い者を呼び出して自ら相撲を取つた。地面に叩きつけられ、投げ飛ばされたが、「倫快なる奴との御意」を示し、松尾忠次郎と名乗らせた召し抱えたと云う。このように、家臣への登用、加増や褒美に関する記事も多いのだが、一方、財政には一向に無頓着だった様子がある。

藩主としての資質

藩財政に関して仁井田摸一郎上書の内とされる刃傷沙汰の伝がある。財務担当役人の献策によつて三、四年先の年貢を担保とする金子借用をしたところ差支えとなり、怒り心頭に発した重倫が自ら役人を成敗したというものである。財政悪化の要因は先代宗将時の婚姻儀礼等の莫大な出費と述べられるが、そもそも一八世紀後期は商品経

豪放にして好奇心旺盛

大峯山へ登山した折、霊山に禁制の魚肉・獸肉を構わず食し、荒行をおこなう崖に突き出た「岩之鼻」に平然と立ち、案内の先達を仰天させた。捕鯨の訓練見物の折には波にもまれる船の舳先に立ち、人々が恐れ入つたという逸話も残る。豪放な性格も行き過ぎると困つたもので、江戸屋敷の向いに

濟の発達と飢饉・天災によつても領主経済が動揺を見せる時期だった。有名な米沢藩の上杉鷹山による改革もこの頃である。先々代宗直の時には特産物生産の奨励などの記事もあるが、宗将・重倫の二代にわたつてはさしたる策が打たれた形跡はない。隠居して西ノ丸に移つた後も大御所として大勢の家臣を引き連れるなど、財政にはまるで無関心だった感がある。葉王院に対する度重なる祈禱依頼もかなりの負担であつたに違いない。

これらの伝をまとめると、重倫は元米剛毅で闊達な性分であつたが、藩政を担う資質を身に着けることはなかつた、となるだろうか。前号で触れたように、長患いを「死症」「因縁」と思い悩むところからは、精神的に相当参つていた様子が窺える。病気を理由に江戸城登城や墓参を取り止めることもあり、元來儀式ばつた場が苦手で

藩主の役柄に疲れていた感がある。安永二年の帰国後、間もなく症状が快然したのも、江戸における強いストレスからの解放が理由なのではないか。先に紹介した逸話からすると、残忍な暴君というよりは、短気で激昂しやすい性格ながら、型にはまらぬ磊落な人物像が窺われる。一方、後半生では念仏行者の徳本上人に帰依するなど、直筆書状に示された仏法への帰依というのは上辺だけのことではなく、父宗将や生母清信院の影響か、信心は厚かつた。そして、度重なる子女に対する祈禱依頼、また、お八百の方に對する寵愛ぶりからは情に篤い側面も見られる。一個の人間として人間味も感じさせるが、大藩の継嗣という立場にはいかにもそぐわない人物だつたと言ふべきだろうか。

おことわり 本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。